

コロナ禍における令和2年度実施教員採用候補者選考試験の結果から

教職支援センター 副センター長
特任教授 榎元 十三男

令和2年度実施 公立学校園教員採用試験結果(延べ人数)

幼稚園…受験者	55名	1次	35名	2次	24名
小学校…受験者	180名	1次	139名	2次	99名
中学校…受験者	20名	1次	11名	2次	6名
高等学校・受験者	3名	1次	0名	2次	0名
栄養教諭・受験者	9名	1次	2名	2次	0名
養護教諭・受験者	0名	1次	0名	2次	0名
計	267名		187名		129名

延べ129名の4回生が公立学校園の教員採用試験に合格した。近年にない合格者数である。とりわけ小学校においては、過去最高の成果を収めることができた。昨年度に比して倍増に近く、伸び率においても過去最高である。

何があっても、自分自身の目的意識を強く持ち、複数受験に果敢にチャレンジするなど、確かな結果を出すところが本学の4回生の強みであり、称賛に値するところである。少しのアドバイスであっても、すべて自分に置き換えつつ実直に受け止め、ほんの少しであっても伸び続けている姿に触れることができたことは、採用試験の結果以上に嬉しい瞬間であった。日常の様々な教職課程の学修を疎かにせず、切磋琢磨した学び合いの蓄えが、様々な場面で花を咲かせ続けているのだと感じる。まさに、これからこそ本学で培った「自立心」「対話力」「創造性」をフルに発揮し、学校現場で子供や教職員や保護者・地域から必要とされる人材として積極的に活躍してほしいものである。

コロナ禍における教職支援センターの取り組み

今年度の教員採用試験対策は、学生が登学できないため、例年通りの対面での対策が全くできない状況が3か月間も続いた。本来であれば、教員採用試験についての各自治体からの情報やその対策のための支援や練習等を重ねる中で、教員としての自分なりの理想像を形作っていくべきところであるが、電話相談や郵送による願書作成・論作文指導・面接練習等だけでは十分とは言えず、ある面こちらの方が限界を感じていた。加えて、学生の身になると、暗中模索の3か月間で、自分のやっていることに不安を抱きつつ、遠隔授業をはじめあらゆることに自分の思いを消化し

きれいなままに過ごしていたことが、電話相談等からも推察され、対面での練習の必要性を強く感じた次第である。

本支援センターでは、個人・集団面接、模擬授業、場面指導等の技術面だけを形式的に教え込み覚えさせるだけの指導にとどまらず、直接対面で練習することによって、個々の学生の豊かな表情や個性的な表現方法にまで目を向け支援することが必要だと常々考えてきた。なぜなら、二人といたない自分らしさを発揮し、状況に応じたコミュニケーション力を深める能力は、教員採用試験を突破し教壇に立ったときこそ、児童生徒理解や保護者対応などに関わって求められる力であり、子供の「生きる力を育てる」という教育の基礎基本に繋がる力だからである。学校現場に送り出す側の責任として、ほんの少しでも自信と誇りを持ち、どんな時でも児童生徒に対して膝を折り、対面して同じ目線で話を聞き、声をかけることができるような教師を育てることが、本支援センターの究極の目標でもあると捉えている。このことは、事務部門も含めた教職支援センターの一体的で共通の願いそのものである。

したがって、思いを共有する事務部長に交渉していただき、7月より対面での練習が認められることとなった。短時間で、効率よく、密を避け、少人数にして、換気を行う、マスク着用など、安全面での細心の配慮を第一に心がけ、実施することとなった。学生たちは、水を得た魚のように満面の笑顔で参加し、互いの関わり合いをより強く深めていったように思う。

「合格者激励会」

毎年「合格者激励会」と称して、学科の教員・支援センターの職員・合格した学生の3者が集い激励会を実施している。今年は思いのほか、多くの学生や教員の参加者が多かった。コロナ禍が続いた反動かもしれない。支援センター長、事務部長のご挨拶のあと、参加いただいた全教員から思いのこもったメッセージも送られた。一言一言に目を見開き頷きながら聴く学生の姿が印象的であった。そのあと、学生が個々に自分の夢や希望、感謝の言葉を「一分以内」で述べた。短い中に、自分の思いを的確に組み立て、表情豊かに、柔らかい口調で力強く堂々と述べることができた。4年間の学修の集大成とでもいふべき見事な内容であり、その成長ぶりに心打たれ、本学の学生の豊かな可能性を改めて感じると同時に、全教職員の支えがあつての神戸女子大であることを痛感した。我々は学生を導きながら、結局は学生に教えられ、勇気づけられていることも実感できた。今年は全学共通の一堂に会した卒業式はできなかった。ささやかではあつたが、教職を目指す学生とともに「激励会」を実施できたことは、この上ない喜びであった。

本支援センターの役割は、教職を目指す学生達の個別のニーズに応じた支援を重ねる中で、その夢の実現に寄与することである。今後も、出口保障は教職課程が認定された大学の使命と受け止め、各学科との連携協力のもと、何が起こっても起っても学生の側に立った新たな取り組みを模索しつつ、目標を共有しながら推進していきたいと考えている。

教え子からのプレゼント

—学級経営の参考に—

教職支援センター
特任教授 松崎隆幸

新型コロナウイルスの影響で令和2年度は人生で初めての経験や思いのままにならないことをたくさん味わうことになった。例えばオンライン授業の実施、当初は私には無理なことだと思い込んでいた。でも多くの方々に助けをいただいて zoom や manaba、kiss システムなどの必要最小限の部分を活用できるようになった。何とかウェビナーやミーティングなどを駆使して前期授業を全うすることができた。かなり大変であったが、パワーポイントをはじめ授業で活用する教材も一から見直すことができた。また、感染防止の観点から全国で様々な対応が求められた。当初は特にうがい・手洗い・消毒の励行や三蜜の回避などが示されたが、何か物理的な距離の確保以上に人々の心の距離がだんだん広がっていくような気がしてならなかった。そのような令和2年4月に自宅に少し大きめの封筒が届いた。差出人を見ると最後に学級担任をした懐かしい教え子の名前である。中には「手作りマスク」が大小併せて4つ入っていた。私と妻用に手作りしてくれたものである。感謝感激のプレゼントであった。

この教え子については、今から四半世紀以上前、高等学校で1年から3年まで3年間連続して学級担任をした。専門学科でクラス替えがなく生徒40名が3年間一緒である。この学級では常々「オンリーワンでいこう」「ホームルームを表彰状で埋め尽くそう」を合言葉にしていた。スマップの「世界に一つだけの花」より先に「ナンバーワンでなくてもオンリーワン」ということを言っていたがそのことを知っているのは、この学級の40名と学級担任の私だけである。この合言葉通りにそれぞれの個性・持ち味を發揮し、学級としてのまとまりをもって卒業時にはHR教室が表彰状で埋め尽くされた。また40名はそれぞれの夢に向かって歩んでくれた。希望する大学、専門学校、企業等へ進路実現した。なかには競馬騎手、大道芸人、牧場経営者になった者もある。現在でも40名の当時の名前と顔が浮かんでくる。以前の同窓会で40名全員の名前を何も見ずに呼名したら彼らは驚いていたが学級担任であった私にとっては当たり前のことである。最後に担任した生徒であるのでいまだにインプットされ続けている。

ちなみに学級経営について以下に示すような現職の先生方に対しての調査がある。

日本の教師が模索してきた「望ましいと考える学級集団」

- 1 自由で温かな雰囲気でありながら、集団としての規律があり、正しい集団生活が送れている。
- 2 いじめがなく、すべての子どもが学級生活・活動を楽しみ、学級内に親和的で支持的な人間関係が確立している。
- 3 すべての子どもが意欲的に、自主的に学習や学級の諸々の活動に取り組んでいる。
- 4 子ども同士の間で学び合いが生まれている。
- 5 学級内の生活や活動に子どもたちの自治が確立している。

また、このような学級集団を形成するために学級担任としての具体的な対応の仕方をまとめている。

学級担任（ホームルーム担任）の心構え

- 1 子どもの存在を尊重する。

①問題行動は注意するが人間性を否定するような言動はしない。②相談された内容は必要な場合以外は他言しない。③ほかの子どもの前で子どもに注意しない。④子どもの批判をその子のいないところでほかの子どもたちにしない。

2 自分から子どもに話しかける。

①自分から名前を呼んであいさつする。②子どもの情報をメモしあいさつのときにひとこと添える。③自分の苦手な子ども・低い評価をつけている子どもにこそ、さりげなく定期的に言葉がけをする。その子どものもつ良い面を言葉にして伝える。

3 子どもが話しかけやすい雰囲気を意識してつくる。

①休み時間や放課後などくつろいで子どもとおしゃべりできる時間を設定する。②自己開示して役割を超えた交流を楽しむ。

4 プラス志向のフィードバックをする。

①感動したことや面白かったことなどの感情を率直に表現する。②子どものがんばりや取り組みんだ熱意に対して小さいことでも言葉にしてほめる。

5 ユーモアと遊び心をもつ。

①子どもと共有でき自分も楽しい話題・趣味をもち一緒に楽しむ。②子どもたちとよく冗談を言う。

学習集団であり生活集団である日本の学級には生き生きする子どももネガティブな反応を示す子どもも存在する。その実態を受け止め、向き合い、子どもの成長を切に願う温かいまなざしを持ち続けること、そうした心構えを自らに刻むことが、学級経営の実践的指導力を高める出発点なのかもしれない。特にこの具体的な対応の仕方は小学校の先生方に対しての学級集団づくりを調査したものであるが、中学校や高等学校にも、学級担任の心構えとして貴重な知恵の数々を見つけることができるように思う。

なお、教え子のプレゼントにはメモが添えてあった。「こんにちは。大変なことになっていますが、お変わりなくお過ごしになっていることを願っています。あまり得意ではありませんが、数年前にマスクを作り始めました。今年このようにまで必要になるとは思いませんでした。大きめ2枚と小さめ2枚です。一度手洗いしてからよろしければ奥様とご活用いただければと思います。フィルターは入っていません。エチケットマスクになります。私は今、産婦人科に勤務しています。ママや赤ちゃん、妊婦さんたちの患者さんを守ることが使命と思い頑張ります。先生、ご家族様もどうかご安全に元気にお過ごしになりますように祈っています。」

今、教職を目指す学生に教職関係の授業や教員採用試験指導などの機会をとおして「学校の教師の使命とは何か？」という問いかけをよく行っている。教育の目的、学校や学校教育が果たすべき目的とは何かを確認しながら「学校の教師の使命は一人ひとりの子どもの未来と社会の未来を創造することである」と整理している。しかし現職の頃、とくに若いときには子どもの未来にかかわっていることは感じるがあったが、社会の未来を創造しているということはイメージできなかった。目の前にいる子どもたちへの対応で精いっぱいだったのである。でも経験を重ねるにつれ、だんだん理解できるようになった。この教え子も看護師として社会を支える一員として立派に活躍している。わたしも子どもの未来と社会の未来を創造することに少しは貢献できたのかもしれない。そのことを感じさせてくれた貴重なプレゼントであった。

参考：河村繁雄「日本の学級集団と学級経営」図書文化 2010

「授業中の教師の話し方」について

文学部 日本語日本文学科
教授 安原 順子

1. はじめに

授業を行う際、オンラインの授業であっても対面の授業であっても、「教師の話し方」は重要である。それにより、分かりやすい授業かそうでない授業かが決まると言っても過言ではない。日本語日本文学科では、毎年、国語科教員志望学生のために「教職研鑽会」実施している。筆者は、日本語日本文学科に所属し、同時に外国人のための日本語を教える日本語教員の養成を担当している。「教師の話し方」は、「教える」という共通点から考えても、共通した重要な問題点である。本稿では「授業力」の1項目として、教師の「授業中の教師の話し方」について考える。

2. 教師の話し方について

国語科教員でも、日本語教員でも、授業中の話し方には学習者から求められる教師像には共通点がある。『成長する教師ための日本語教師ガイドブック 上』（2016）から引用すると、教師に求められる話し方には、以下のようなものがある。

- (1) 速さ・声量・位置・姿勢に気を付けて、明るく話す。
- (2) 適切に間を取って話す。
- (3) 正確な意図をもって話し、繰り返しやつけ足しは避ける。

3. 国語科教員と日本語教員の授業における共通した話し方

言葉を教える授業では、通常、マイクなどを使って話すことはないだろう。したがって、教室の大きさや学習者数にもよるが、大きく、はっきり、ゆっくり、時間内に終わるように、聞き手である学習者を見て、待つ話し方をすることが重要である。

(1) 大きな声で話す

「授業中に大音量で話す」ということではなく、授業に参加している生徒や外国人学習者に十分聞き取れる音量で話す、ということである。

(2) はっきり話す

文末まで、はっきり聞き取ってもらえるように話す。特に、文末で声が小さくなると文意が分かりにくくなってしまう。

(3) ゆっくり話す

授業では、あせらず、ゆっくり話すことが大切である。ゆっくりすぎる話し方は、たとえ初級レベルの外国人学習者対象の授業であっても不自然である。教師によって、話し方のスピードはさまざまである。自分のいつもの話し方より、若干ゆっくりという話し方が聞き取ってもらいやすいだろう。

(4) 時間を守って話す

授業では、授業時間内に授業を終わることが必須である。時間を守って話すことが肝要である。

(5) 聞き手である学習者を見て話す

聞き手の反応を確かめながら話さなければならない。そのためには、下を向いて教案等を読んでいては授業にならない。

(6) 「ポーズ(間)」と「待つ」こと

授業は限られた授業時間内に終わらなければならない。ただし、急に問題が起こり、時間内に終われそうにないときもある。その場合、多くは話すスピードを上げ、「ポーズ(間)」を取ることを考えずにどんどん話を進めてしまう。そのような話し方では、生徒や学習者の十分な理解を得られない。

実は、「待つ」つまり話す際に適度に「ポーズ(間)」を入れる、内容によって話すスピードを変えることは良い授業の話し方の重要なポイントである。

4. 話し方の訓練

どのようにすれば話し方の問題点を克服し、信頼される教師になれるのだろうか。

(1) 時間を測って練習する

実際の授業の場で、生徒や学習者がいることを想定し、練習する。練習することによって、自己の授業を振り返り、よりよい授業ができるように十分な準備をすることができる。

(2) 自分の話し方を客観的に評価してもらう

自分の話し方を、他の人に聞いてもらい客観的に評価してもらう機会を持つ。それにより、聞き取りやすい話し方に自分で修正することができる。

5. まとめ

本稿では、国語科教員と日本語教員の「授業中の話し方」における問題点について考察した。準備した授業内容をどのような話し方で進めるかは、教師にとって乗り越えていかなければならない問題の一つである。このような問題点を乗り越えてこそ、教師として高い評価を得られると考える。

参考文献

川口義一、横溝紳一郎 (2016) 『成長する教師のための日本語教師ガイドブック 上』

ひつじ書房

向後千春 (2017) 『上手な教え方の教科書』技術評論社

佐藤佳弘 (2018) 『わかる!伝わる! プレゼン力』武蔵野大学出版会

オンライン授業の利点

文学部 英語英米文学科
准教授 本 田 隆 裕

2020年度（正確には、2019年度末以降）の教育現場の混乱は、校種を問わず、学校関係者にとって生涯忘れられないものになるだろう。特に大学ではこれまで経験したことのない遠隔授業（オンライン授業）を急遽2020年4月より実施することになり、教員側も学生側も不安を抱えたまま新学期が始まることとなった。（「手探りで始める」という言葉を聞いたことは誰しもあるだろうが、これほど多くの人々が同時にこの言葉が表す状況を経験することはそうなかったと思われる。）

オンライン授業は、大きく分けると「同時双方向型」と呼ばれる方式と「オンデマンド型」と呼ばれる方式がある。「オンデマンド型」については、受講者（学生）自身が都合の良い時間に学習に取り組めるため、不安定なインターネット環境の下にあったとしても何とか受講できる機会が保証されるメリットがあるが、従来の対面型の授業とは全く異なる授業形態であるために、その利点や問題点等、これまでの授業と比較することは容易ではないと思われる。ここでは、同時双方向型のオンライン授業と従来の対面授業を比較して、その利点や問題点などを述べたいと思う。

同時双方向型のオンライン授業では、Web会議サービスを利用して行われ、本学ではZoomが使用されることになった。Zoomを使えば、教員側のコンピュータの画面と音声だけでなく、教員側・学生側のビデオカメラ映像と音声を全員で共有することができる。Zoomの利点は、これらの機能を少ないデータ通信量で行えることにある。私自身はもともと板書が苦手であるため、KeynoteやPowerPointなどのプレゼンテーションソフトでスライドを作成して教室のプロジェクタから投映していたため、実質、オンライン授業で変わった点は、これらをZoomの画面共有で行うことになった点だけである。むしろ、教室のスクリーン上よりも各自のコンピュータやスマートフォンの画面の方が鮮明に表示できるため、スライドの文字サイズや色など選択の幅が広がったと言える。ただし、Zoomではデータ通信量が抑えられていて、スライドのアニメーションはうまく表示されないので、ビルド（アニメーション）の各段階を1ページごとに書き出したPDFにし、それらをパラパラ漫画のように動かして表示するなどの工夫が必要であった。また、教員からの発問に答えてもらう際も、学生の声が各自のマイクを使って拾われるため、しっかり聞き取ることができた。対面授業では、よほどハキハキ答える学生の声以外は聞き取るのが難しいことも多く、一人ひとりの学生の発言をきちんと共有する上で非常に便利な点であると言える。さらに、チャット機能も使えるため、声に出して自分の意見を言いにくい学生（あるいは授業を受けている時にたまたま声を出しづらい環境にいる場合など）も文字情報で考えを共有することができる。したがって、従来の対面型授業では得ることが難しかった声を拾うことができると言える。

オンライン授業には、このようなメリットがある一方で、デメリットがないわけではない。2020年度は後期から（正確には、前期から一部科目の必要な授業回でも実施されていたが）対面授業が行われているが、オンライン授業よりも授業中に学生から質問がよく出るような印象がある。逆に言えば、オンライン授業では、授業中に質問しにくい状況であったものと思われる。オンライン授業では音声を全員で共有しているため、教員も含め、同時に音声を出せるのは一人だけになってしまうことから、発言そのものを遠慮してしまうことや、対面授業では近くの学生と少し相談してから質問できるのに対して、オンライン授業ではそれができないことが原因かもしれないし、オンライン授業ではお互い表情を見ることができないので話しにくい（あるいは話すタイミングをつかみにくい）のかもしれない（オンライン授業ではプライバシーの問題や通信量抑制のため、ビデオカメラは使われないことが多い）。ただ、こういった問題はいずれ技術の進歩や利用者側の慣れによって解決できるであろうし、オンライン授業後にクラウド型教育支援システム（本学ではmanabaと呼ばれるシステム）を使って質問が寄せられることもあったので、今後も残るような問題ではないと思われる。

今後の授業形態がどのようになるかはわからないが、必ずしも望まれて始まったわけではないオンライン授業は、図らずも、黒板と印刷資料しか使わない授業モデルを再考する機会になったのではないかと思う。夏目漱石の『三四郎』の中で、大学の先生が黒板に書かれたドイツ語の字を見て消すシーンが描かれているが、黒板と印刷物だけの授業は授業形態として明治時代から何も変わっていないと言えそうだ。何事も変えることが常に利点を生み出すとは限らないが、2020年度よりも前にはこういった授業形態がごく普通の光景として見られていたことの方が、私からすると、むしろ奇妙なことに思われる。今後は、対面型で問題なく授業ができる状況であればオンライン授業を行う必要はないだろうが、2020年度の大混乱によって偶然注目されることになった様々な技術は是非今後も様々な教育活動に取り入れていくべきだと考える。今使っている技術もいずれは古めかしいものになるだろうが、重要なことは、新しい情報機器や技術を使うことそのものよりも、今までの常識を疑うことだと思う。このことは前々からある程度はわかっていたことだが、2020年度はそれを痛感させられた年であった。

自律学習と英語多読という仕かけ

文学部 国際教養学科
教授 吉岡 志津世

英語教育には様々なアプローチがあるが、ここでは英語多読学習法を考えてみたい。

英文読解力を高めるには精読 (Intensive Reading) と多読 (Extensive Reading=ER) がいわば車の両輪ともいえるが、授業という一定の統制を伴う集団学習にあってはどうしても精読が中心とならざるを得ず、多読の効用が指摘されながらも教室では実践しにくい面がある。多読学習が授業という学習形態になじみにくいのは、多様な学習歴を持ち興味関心の異なる学習者が同じ教科書で修得すべき内容を学び評価を行うという点にあるだろう。多読の効用は基本、「読める本」「読みたい本」を学習者個々のペースで読んでこそ期待できるからである。たとえば、英語多読学習で成果を上げている SSS 英語多読学習研究会¹⁾の提唱する「多読三原則」、すなわち「辞書は引かない」「わからないところは飛ばして読む」「つまらなければやめる」、あるいは Day & Bamford の「多読指導 10 原則」にある「リーディングはひたすら読むことによって報われるもので、リーディング後の課題は最少、あるいは皆無なのがよい」に見られるように、多読はまず評価自体になじみにくい。多読は「楽しく読める」ことが必須であって、負荷は少なければ少ないほどよい。

このような多読の性格からすると、むしろ教室を飛び出して、授業での学びの展開につながる自律学習の定着を図る仕かけとして導入するのはどうだろうか。もちろん授業での学修に連動させるとなると学習者任せではなく、さらなる仕かけが必要となる。

第 1 に、当然のことながら、多読図書の整備である。学習者の読みたい本、学習者のレベルに応じた読める本、多種多様なジャンルや話題に関する本がなければならぬ。多読の効用は古くは夏目漱石や Arnold Palmer に遡るが、実際に多読が教育に導入されることになるのは、1980 年代初頭からエディンバラ大学の The Edinburgh Project on Extensive Reading が始動してからであり、そこで graded readers の評価・教材開発が進み²⁾、現在では、Oxford University Press, Pearson, McMillan などからさまざまなシリーズで graded readers が出されている。また音源付の読本もありリスニングにも活用できるものもある。さらには e-books としても用意され、いつでも、どこでも自分のペースで多読できる教材が身近にある。一度には無理でも、対象学習者のレベルや興味・関心に応じて揃えていけばいいだろう。

第 2 に、1 冊の英語本を楽しく楽に読み切ったという、達成感を伴う読書体験をさらなる読書につなげるための仕かけである。たとえば、Book Report などの読書記録である。読了した日、書名、レベル、語数、読了に要した時間、簡単な読後メモ（「おもしろかった」「辞書を引いてしまった」などひと言でもよい）を記録し、読書体験を「量」として把握・実感することが次の読書への動機づけになるかもしれない。また、多読図書コーナーに貸出図書ランキングや学習者自身や教員による「おすすめ本」、「新着図書紹介」などを掲示するのもいいだろう。どんな本が人気なのか、他の学習者がどんな本を読んだのか、を見ることによって関心分野が広がる契機になるかもしれないし、何を讀んだらいいのかかわからない学習者の読書案内になるだろう。

第 3 に、読書体験の共有の場の提供である。多読はインプットの連続であり、個別に行われる活動である。母語で快適に生活できる日本にあって日常的に必要なとしない英語という外国語を小学校から

高校まで必修科目としてほぼすべての日本人が学習する場合、学習者の情意ファクターを無視することはできないだろう。特にペアワークやプレゼンテーションが強調される昨今の英語教育では、人前で発話することに抵抗感があったり緊張したりなど学習意欲が低減し英語嫌いになったり、苦手意識を持つ場合も少なくない。また、会話練習などでは通常相手が必要で、授業外で自分のペースで練習できない場合が多い。対して、多読学習は独りで進めていくことができる点ではハードルが低く、多読を通して自由に英語に親しむことができると言えよう。多読本の難易に関わらず、本当に面白かったり感動したり新たな発見があったりすると、その読書体験を人に伝えたい、共有したいと思うもので、独り読書が自発的コミュニケーションを促すことにつながるとすれば、Book Talk などの自分の読書体験を共有できる場を仕掛けておくこともできる。

第4に、さらに発展させる仕掛けとして、朗読やいわゆる「読み聞かせ」のといった read aloud の機会を提供することもできるだろう。絵本など語数も少なく read aloud には適しており、気に入った絵本を読み取ってストーリーに即して情感を込めて読む、これは単なる音読ではなく表現者として演じるおもしろさの体験につながる。詩でもいいし気に入った一節でもいいだろう。マイペースで評価を気にせず行える英語学習としての多読がアウトプットとしても可能性を有していると言えるだろう。

多読は統制・評価にはなじまないが、多読三原則に基づく多読法によってインプットを増やし読みの楽しさを体感することによってアウトプット活動へ、さらには主体的・自律的な学習へ、という正のサイクル (a cycle of growth) の端緒にすることができる。その学びの姿勢は教室授業の学習にも反映されるかもしれない。その正のサイクルを円滑に回すためには、単に多読本を用意して学習者任せにするのではなく、上述したような指導者側の工夫や仕掛けが必要である。

サイクルのスタートラインはいかにして多読図書に触れさせるか、多読室や多読コーナーに来させるか、であるが、授業で多読学習の紹介や方法の指導を行い、場合によっては、最初は負荷のかからない課題とすることも必要であろう。多読活動を定着させるには、「読める本、読みたい本を楽しく気楽に」の多読の世界への水先案内人として指導者の役割は小さくないが、ファシリテーターとしての役割に徹することを忘れてはなるまい。また、これは英語教育に限ったことではないだろう。

<注>

1) SSS 英語多読学習研究会 HP 参照。 <http://www.seg.co.jp/sss/> (2021.3.20 閲覧)

2) 小林めぐみ他編『多読で育む英語力プラスα』成美堂、2010.

英語多読学習について網羅的解説と実践事例が豊富に紹介されている。本稿の多読については多くを参照させていただいた。

“わかってちゃん”

文学部 史学科
教授 中尾 友 則

最近、学生を見ていてちょっと気にかかることがある。それは、他者（相手）との心のキャッチボールが苦手な学生が増えているのではないか、ということである。とはいえ、ここで問題にしようとするのは、ひっこみ思案で消極的なタイプの学生についてではない。むしろ、自分の意見や考えを積極的に主張するタイプの学生に見られる傾向についてである。彼女たちは相手が何を感じ何を考えているかにあまり関心をもたない。自分の気持ちや考えを理解してほしいという欲求が強く、自分の意見・基準に合わない相手に問題があると考えようとする。——筆者はこういう学生を“わかってちゃん”と呼んでいる。このタイプの学生が教員志望者にも増えているような気がするのである。

なぜここでこの“わかってちゃん”を問題にするかと言うと、こういう人は積極的で正義感も強く一見教員に向いているように見える。しかし、実はそうではないと思うからである。

筆者は、小学校・中学校・高等学校・専門学校・短大・大学すべての教壇に立った経験があるが（中学校は教育実習、専門学校は非常勤講師であったが）、その経験から、とくに小学校から高等学校までの期間は、何よりも相手（児童・生徒）のその時々状況を把握し、その状況に応じて適切に関わり、前に進めるように背中を押してやるのが重要だと感じている。そのためには、頭からそれは間違い、それはダメというのではなく、また自分の考えを一方向的に伝えようとするのではなく、まず相手の感じていること、考えていることに耳を傾け、よく理解しようとする姿勢が不可欠だと考えるからである。

もちろん、教育する側も不完全な人間であり、その時々いろいろな状況の中に生きていることからすれば、いつも適切な判断ができるとは限らず、常に良い効果が生まれるとは限らないが、少なくとも、そういう態度を身につけようと努力することは教員を志望する者にとって極めて重要であると思われるのである。

では、そういう態度を身につけるためにはどうすればよいだろうか。

最も身近な機会はゼミではないかと考えている。

ゼミの時間、他のゼミ生の報告をよく聞き、わからないところは質問をして、言おうとすることをできるだけ正確に理解する。そのうえで、それに対する自分の意見を述べ、報告者が研究をさらに前に進めていけるように促す。そういう姿勢でゼミに臨むことによって、少しずつ身についてくるのではないかと思うのである。

できれば、ゼミの先生にお願いして司会を任せてもらえればさらによいかもしれない。そこでは報告者の発表内容を正確に聞き取り要約すること、そして、それに対する各発言者の内容と、相互の関係をよく把握して、全体の議論を前に進めていくことがどうしても必要となるからである。

教育的ニーズのある子供のわかる授業を目指して

—ICT を活用した授業—

文学部 教育学科
准教授 谷山 優子

1 発達障害のある子供の特性をふまえた授業

通常の学級にも、発達障害の有無にかかわらず理解しにくさのある子供たちが在籍している。このような子供たちは、なぜ理解がしにくいのか。一人一人の子供がなぜ理解しにくいかに教師が気づく必要がある。例えば、以下のようなところで、困っている場合が多い。

- 社会性・・・人の気持ちがわかりにくい
- 想像力・・・視点が限定される（全体をバランスよく見れない）
- コミュニケーション・・・人との関わり方がわかりにくい
- 衝動性・・・すぐに行動してしまいあとで後悔する、忘れっぽい
- 読むこと・・・資料をしっかりと読み取れない
- 話すこと・・・うまく気持ちが伝えられない
- 書くこと・・・考えたことを書いて表すのが苦手
- 聞くこと・・・重要なことをよく聞き漏らす
- 推測する・・・状況をうまく推測できない

発達障害は、脳の中樞神経に何らかの原因があるとされている。脳の特性によって、目から入る情報を取り入れることが得意であるとか、耳から入る情報が入りやすいなどということがわかってきた。そうすると、これまでの一斉授業のスタイルではなく、見てはつきりわかる視覚化や相手の気持ちを自分のことのようにわかる動作化などを授業に取り入れていく必要があるといえる。

ユニバーサルデザインの授業とは、どの子供にも公平で、柔軟で簡単で、身体に過度の負担なく必要な情報が認知できる授業であるとされている。アメリカの CAST (the Center for Applied Special Technology) が進める UDL (Universal Design for Learning) では、「理解のための多様な方法」「行動と表出のための多様な方法」「取り組みのための多様な方法」と子供にわかる授業の方法として3つの枠組みでみていく。教師は、子供が理解できるように多様な方法を提供し、子供が自分のやりやすい方法を選べるようにしてやる必要がある。また、子供がわかったことを発表する手段として、口頭で発言すること、書いたものを提示すること、絵や図で説明することなど多様な方法から選ばせてやるような柔軟な対応が必要である。授業への取り組みも、一人で取り組む、他者と協働で取り組む、録画したものを何度も止めたり進めたりしながら理解していく、2度も3度も同じ授業を受けるなど多様な取り組み方を提供してやる必要があるということである。

しかし、一人の教員が 40 人の多様な認知特性のある子供たちに対応してくことは難しい。簡単に柔軟に、授業にアプローチできるようにしてやる方法としては、ICT の活用が効果的である。パソコン、タブレット PC、電子黒板、大型ディスプレイなどの機器を障害特性や発達の段階に応じて活用することで指導や支援をかなり充実させることができる。ICT の活用で障害の困難さを軽減できることの事例が、文部科学省より示されている（表 1）。

表 1 ICT の活用によってできるようになることの例

障害による困難さ	ICT の活用	できるようになること
読む	聞く	教科書や本で学ぶことができる。
聞くことはできるが読むことが困難であるため「教科書を読む」ことができない。	電子化された教科書の文章を音声で「聞く」。	情報収集の幅が広がる。
書く	入力する	ノートをとることができる。
話すことはできるが書くことが困難であるため「解答用紙に答えを書く」ことができない。	文字を鉛筆で書くのではなく、手書きでの書き込みやキーボード等で入力する。	テストを受けることができる。
意思を伝える	カードと音声で伝える	やりたいことや自分の気持ちを伝えることができる。
自分で的確な言葉を選んで気持ちを伝えることが難しい。	電子化された絵カードを使って自分の意志を選択し音声出力する。	
話を聞く	映像と文字で見る	次に何をするのか理解できる。
聴覚情報の活用が難しく、言葉で説明されてもうまく理解できない。	映像を見ながら説明を読む。	一人で作業を達成できる。

（文部科学省（2018）「発達障害のある子供たちのための ICT 活用ハンドブック」より）

2 ユニバーサルデザインの授業づくりに全教師で取り組んだ A 校

A 校は、1 年生から 6 年生で発達障害の診断のある子供が合計 22 名（1 学級あたり 1～2 名）おり、そのうちコンサータを服薬している子供が 5 名、通級指導教室に通う子供が 6 名であった。他にも教育的ニーズのある子供が多く、全教師がすべての教科でユニバーサルデザインの手法で、どの子もわかる授業づくりに取り組むことにした。

学期ごとに特別支援教育の専門家から指導助言を受け、担任の授業が一人一人の子供のニーズに合っているか、支援の優先順位は子供の困難に対して妥当かなどを明確にしてもらいながら授業改善を行っていった。

2 年 1 組は、ADHD の診断があり服薬している子供が 1 名、担任が気にしている学習理解が遅い子供が 3 名、集中しにくい落ち着きのない子供が 3 名、気分的なむらがあり整理整頓ができない子供が 2 名いた。専門家からは、文字の形や人物の形がとれていない子供が学級に約半数いる

と指摘された。担任は、特に道徳の授業に力を入れ、多様なニーズのある子どもも互いに思いやりのあるクラスにしたいと考えていた。授業改善前の道徳科の授業では、担任が抑揚をつけて教科書を読んでいるにもかかわらず、大半の子供がぼんやりしたり、姿勢が崩れていたり、手遊びをしているという状態であった。教師の発問に対して、衝動的に答える、挙手して指名されて立った途端に忘れる、関心のある言葉に反応するだけであとは手遊びをするという子供が目についた。担任が、熱心に授業を進めれば進めるほど、教師の言葉が多くなり、子供たちは聞き役に退屈するという悪循環に陥っていく。どうすれば、子供たちが主体的に考える授業になるのか。

そこで、担任は、インターネット上の無料素材をプリントアウトしたものをいくつか授業前に黒板に貼っておいたり、授業に関連するぬいぐるみや小物などを置いたりした。授業内容に関連するものを事前に見たり、触って遊んだりしながら、「今からどんな授業をするのかな」、「なんか楽しそう」というような関心を児童に持たせ、学習意欲につなげていく仕掛けをした。授業では、動画のほうが集中できる子供が多いこともあり、ICT 機器と無料動画サイトも活用し、どの子供も自分の考えをまとめたり、友達の考えを理解したりすることに過度の負担なく行えるようにした。担任は、長く話すことをやめ、資料にある登場人物の気持ちを当事者の視点に立って、子供たち自身の口から感じたことを話させる場面を多くした。その際、担任は、多角的で多面的な視点から話すよう促すのみであったが、次第に子供たちの発言は、様々な視点から繰り出されるようになり、「こんなことをしたからこうなったんだ」という内省的なものから「だから、こんな

時はこうしたらいい」と考えを整理しつつ、自分なりの発表の仕方ではあるが、非常に活気のある活発な授業に発展していった。

授業後は、子供たちが自分たちの行動を道徳の授業の登場人物にたとえながら楽しそうに遊んでいる姿が見られることもあった。担任は、そのような子供たちの様子や発した言葉をできるだけたくさん拾い、「学級だより」に書いて、子供の考えをさらに深めさせるようにしていった。



写真1 授業前にぬいぐるみなど置いておく

3 個別最適化された学び

わが国が向かう「Society5.0」の社会においては、個別最適化された学び（文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力など）が可能となり、今までにない新たな価値を生み出し、一人一人が快適で活躍できる社会を創ることができるとされている。コロナ禍もあり、GIGA スクール構想もかなり前倒しとなり、一人一台のタブレット端末も整備されつつある。ICT の活用は、子供が授業を理解するためのアプローチのために使う手段であり、授業の目的ではない。どのように用いて、何を理解させるかということ教師は肝に銘じて取り組む必要がある。子供一人一人の将来を見据えながら、その子らしい生きる力を育む学校、学級、授業の具体的な取り組みが今後ますます求め

られている。

<参考文献>

文部科学省（2018） 発達障害のある子供たちのための ICT 活用ハンドブック

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/09/tsujo_tsukuba.pdf（2020.12.25）

トレイシー・E・ホール他編 バーンズ亀山静子訳（2018） UDL 学びのユニバーサルデザイン
東洋館出版

谷山優子(2020) 教員が考える子供たちに育成したい資質・能力—教員アンケート調査の分析から— 臨床教育学研究第 26 号 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 pp.17-32

内閣府（82016） Society5.0 第 5 期基本計画 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/
（2020.12.25）

文部科学省(2020) GIGA スクール構想の実現について

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm（2020.12.25）

外務省(2020) JAPAN SDGs Action Platform SDGs とは？

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>（2020.12.25）

谷山優子(2021) 特別支援教育を根幹とした通常の学級における道徳科の授業

柴原弘志、七條正典、澤田浩一、吉本恒幸編著 新道徳研究全集第 4 巻 学文社

教育実習を学ぶの場

家政学部 家政学科
教授 田 中 陽 子

教育実習では中学生や高校生を前に慣れない授業をします。普段なら教諭の先生が行っている授業ですから、実習生といえどもそれなりに高いレベルが求められます。しかも、授業を受ける側からする側になって逆の立場に回るのですから、スリルに満ちあふれています。でもほとんどの学生さんは、緊張感に押し潰されることなく最後までやり遂げます。それを支えるのは鈍感さでも気の強さでもなく、実践力にあります。

授業実践に関する知識や理論、授業をするための技術は分かちがたい関係にあります。同様のことは教科専門科目についても言えます。実習で何度も教材研究や授業実践を経験して、ようやく大学で学んだ知識や技能が実践力になり、内容論と教材が結びつくようになります。それというのも、それまでに教科や教育全般にわたる知識の集積があればこそ、知識や技術が現実に合わせて再構成され、大学での学びが意識されるようになるのだと思います。学生さんのなかには大学の様々な授業を通して得る知識や情報に、断片的な印象や実際との距離を感じている人がいるかもしれませんが、知識は集積されると現実に触れる機会も高まり、大学の授業と実習での経験が噛み合うようになります。実習は大学で得た知識を現実の様々な場面で調和のある知識として活用する知的な営みであり、教育実習は大学での学びを実際の場面で再構成して活用する機会であると言えます。

実習中、研究授業を参観して成長したなど感じるものの一つに、生徒への語りかけや言葉の使い方が上手になっていることです。大学での模擬授業とは比較にならないほど、生徒を前にして出てくる言葉は冴えています。私はそれを生徒に鍛えられた力だと捉えています。様々な感情を素直にぶつけてくる大勢の子どもに毎日接していると、可愛いと感じるやさしさが育ち、良好な関係を築きたいという意欲が膨らみ、自然に返す言葉は成長するのでしょうか。感じるものがあってそれを言葉にすることが大事で、それを繰り返すうちにいろいろなものが見えてきて、言葉も表情も豊かになっていくのだと思います。初めて模擬授業を経験する学生さんのなかには、教科書の記述を追って説明しようとしたり、参考文献やネットの文章を寄せ集めたメモを読んだりする人がいます。このようなあらかじめ準備しておいた説明は書き言葉で構成されます。書き言葉は無駄がなく文章として整えられていますが、一面では過去の言葉です。そのままでは生徒を理解に導く言葉にはなりません。授業の場面では話し言葉に代えてその場に出てきた言葉にし、自分の気持ちやエネルギーを吹き込んで生徒に伝える必要があります。つまり、どのような言葉で説明するかを生徒とのリアルな関係の中で再構成できなければなりません。

授業をすることはとても大変ですが、現実の中で学んだことは永続的な力となって実践を支える底力になるはずです。